

「異文化」の創造的融合の理解と地域文化活性化のための 相互交流を目指した日本語文化研修 (IX)

—“大和地域 (飛鳥・吉野・橿原・桜井) の文化史” の実地研修 —

A Study of Field Trips Held as Japanese Language and Culture Training Course to Understand Creative Cultural Fusion and to Promote Exchange (IX)

— A Field Trip to Study the History of Culture in Yamato District (Asuka·Yoshino·Kashihara·Sakurai) —

戸 田 利 彦

TODA Toshihiko

In the last paper, a field trip to study regional cultures held during the Japanese language and culture courses of a university was analyzed and problems were summarized for future plans and practices of study camps and field trips. This paper focuses on a field trip to study regional cultures of Yamato. It is planned and put into practice for the purpose of understanding the cultures of Asuka district, Yoshino district, Kashihara district and Sakurai district of Nara Prefecture. Its characteristics are summarized as follows:

- 1 This field trip especially attaches importance to understanding creative cultural fusion and promoting exchange and invigorating the local cultures.
- 2 This field trip is a result of two field trips in Kyoto, a study camp in Hiroshima City, a small field trip in Hiroshima Prefecture, a field trip in Setouchi, a field trip in Shimane Prefecture, a field trip in Geiyo district, a field trip in West Chugoku district, a field trip in Yamato district, a field trip in Kibi district, a field trip in Tsukushi district, a field trip in Oomi district, a field trip in Sanuki and Tosa district, a field trip in Settsu and Yamato district, a field trip in Buzen and Bungo district, a field trip in Yamashiro district, a field trip in Kii district, a field trip in Hizen district, a field trip in Nishisetsu and Awaji district, a field trip in Izumi and Kawachi district, a field trip in Higo and Hyuuga district, a field trip in Yamato and Ise district, a field trip in Tsukushi district, a field trip in Yamato district and a field trip in Yamato district.
- 3 A regional study concerning the history of culture in Asuka, Yoshino, Kashihara and Sakurai district, is stressed in this trip.
- 4 This field trip includes two lectures, four investigations with lecturers and two free talks by local lecturers.
- 5 This field trip was planned and put into practice mainly by students who are members of the Hijiya University Japanese Language Culture Course.
- 6 There are 16 participants who were enrolled in 'Nihongobunka Kenshuu (Japanese Language and Culture Training Course)' for third year students.
- 7 An inspection trip by a teacher was also made before this field trip.

Practices of the field trip are analyzed based on questionnaires filled out by the participants.

Then, problems are summarized for future field trips.

はじめに

〈第Ⅶ期3年計画の意図〉

第Ⅶ期3年計画の2年目は、2泊3日の日程で、大和地域の飛鳥・吉野・橿原・田原本を訪問エリアとし、現地で一日借り上げバスを2日目午前と3日目午後に利用して実施した。

第Ⅶ期の3年目の今回も、前回と同様に、星・水・山を考察対象として、訪問エリアそれぞれの“自然”と関係の深い“まつり”の実際を踏査・考察することを主眼とした。

〈訪問エリアの選定〉

現地集合・現地解散の形式で中核的な研修エリアを宿泊地として連泊する滞在型研修であることを考慮して、まず、飛鳥を宿泊地として決めた。次いで、後述する今回の研修の共通テーマも勘案しながら、主要な研修エリアとして、吉野を飛鳥とセットで選定することにした。さらに、大和三山という“山”を祭祀の対象としていた藤原宮のあった橿原、そして、初期ヤマト王権成立の礎となった日本最古とされる都市の纏向、その統治者の可能性もある卑弥呼を有力な被葬者とみなす日本最古の巨大前方後円墳である箸墓古墳、そして、都市纏向の政治・経済・祭祀上の機能とその統治者が被葬者と目される箸墓古墳の祭祀面での位置取りに関与したことがうかがえる三輪山のある桜井を訪問エリアに加えた。

以上のエリアを訪問し、“星・水・山とまつり”を主たる考察対象として、史蹟・文化施設・景観などの直接体験を通して実地踏査し、また、地元講師との交流を行うことにした。あわせて、“自然”と“まつり”の外に、参加者の個々の興味・関心に基づいて、歴史・文学・芸術などの観点から大和の文化を考察することにした。

さらに、第Ⅶ期の研修においても、“日本の異なる地域の文化”としての“[異文化]”の“融合”も含めて、精神文化を中核とした“[異文化]の創造的融合”に着目することにした^{注1)}。

〈訪問地域の特徴と共通テーマの設定〉

今回の研修の対象地域である大和は、その最大の特徴として、大和盆地という典型的な盆地を持つこと、また、そこが、日本の国土の中央であること、さらには、そこが日本創生の地であることがあげられる。

大和では、“星”“水”“山”といった“自然”を背景に、“まつり”を生み出す日本人の心のありようが発現してきている。その意味で、大和は、“日本人の心の源流”としての特徴を持つ地域である。

そこで、今回の研修では、内容面を考慮し、共通テーマのタイトルを、“星・水・山とまつり 日本人の心の源流：大和の文化を訪ねる—飛鳥・吉野・橿原・桜井—”とした。

〈今回の研修における新しい試み〉

今回の研修は、全員参加形式の学校（日本語文化専攻）行事、全13回の自由参加形式の学会（日本語文化学会）行事を経て行われた第21回のコース行事（授業）である。過去20回の研修^{注2)}の問題点もふまえ、‘瀬戸内地域及びその近接地’外の通常研修として2泊3日の日程で実施した。

新しい試みとして前回から取り入れたことは、今回もすべて継続した。特に、今回の新たな試みとしては、従来の‘高松塚古墳及びキトラ古墳の壁画に描かれた中国系の天文図及び朝鮮半島系の四神図’と‘藤原宮跡と大和三山の位置関係に見る三山信仰とその中国の三神山信仰からの影響’に加え、‘纏向遺跡大型建物遺構近くから出土した道教の影響がうかがえる大量のモモの種’を中核とした‘気’の文化の視点を変えた主題化、近隣の副研修エリアとしての桜井の選定、近隣の副研修エリアとしての橿原の3回連続選定による準レギュラー化、最終研修地からの南阪奈道路経由での現地解散場所の大阪駅への移動などを取り入れ企画・運営を行った。

〈本稿の目的〉

今回の研修を行った結果、「異文化」の創造的融合の理解と地域文化活性化のための相互交流を目指した日本語文化研修”のあり方について、改めて有効な視座を得ることができた。そこで、本稿では、今回の研修の結果の報告を行うと共に、授業科目としての「日本語文化研修」を中核とした新企画としての第Ⅶ期日本語文化研修のあるべき姿について考察することを目的とする。

I. 企画の趣旨と研修参加学生の事前研修の流れ

〈企画の趣旨〉

「第22回日本語文化研修 星・水・山とまつり 日本人の心の源流：大和の文化を訪ねる—飛鳥・吉野・橿原・桜井—」の訪問地域は、前回実施の「第21回日本語文化研修 星・水・風とまつり 日本人の心の源流：大和の文化を訪ねる—飛鳥・吉野・橿原・田原本—」の参加者を対象にしたアンケート調査の結果、過去の実績とテーマの系統性、最近の話題性などを総合的に判断して決定した。特に今回は、前々回より従来の移動型研修から滞在型研修へと形式が変更となった点をも考慮し、一昨年、昨年に続き大和地域を訪問地域とした。

今回の研修の趣旨は、大和の文化について、日本古来の精霊崇拜に起源を持つ神道に、日本という国が発祥した地域ゆえに、儒教、仏教、道教などの外来宗教が早期に流入し、また、受容される中で、先進的な信仰が成立・継承されてきたという観点から考察することである。そのために、まず、日本最古の都が形成され、仏教公伝の関係地、あるいは多数の道教関連遺跡のある飛鳥とその奥座敷として道教の神仙境と目された宮滝のある吉野を基軸として訪問した。また、大陸伝来の道教における三神山信仰を介して、大和三山を基準に造営された、条坊制による日本最古の本格的な都城としての藤原京のある橿原、大和盆地の東南部に立地し、東は伊勢街道を通して東国につながると共に、初瀬川（大和川）を介して大阪の難波につながり、三輪山山麓に大神神社や巻向山山麓の微高地に纏向遺跡などがある桜井を訪問した。

タイトルにある“日本人の心の源流”は、“大和が、日本という国が発祥した先進地域ゆえに、儒仏道などの渡来文化としての外来宗教が早期に流入・受容され、日本古来の神道と融合する中で、日本的な信仰を成立・継承させ、日本の中央に位置する盆地という特殊な地理的条件のもとで、日本人の精神の中核をかたちづくってきた地である”という大和の地域性をシンボリックな語句を用いて表現したものである。

〈研修参加学生の事前研修の流れ〉

研修参加学生の事前研修の流れは、前回同様である^{注(3)}。それぞれの研修イベントの前夜までに、事前に自由研修計画書^{注(4)}を提出することを確認した。

II. 実施後の冊子の編集—『土地のたから まるかじり』第22号

今回の研修の報告冊子として、『土地のたから まるかじり』第22号を発行する予定である。

まず、講演や現地説明などをお願いした講師の方々からいただいた原稿を、「土地からのメッセージ」として掲載する。執筆者は以下の通りである。

木村三彦氏（飛鳥観光協会ボランティアガイド）／富田良一氏（奈良まほろばソムリエの会会員ガイド／元吉野町観光ボランティアガイドの会会長／郷土史愛好家）／中東洋行氏（吉野町文化観光交流課文化財保護活用室／吉野歴史資料館主査）／上山好庸氏（飛鳥観光協会会長／写真家）／橋本輝彦氏（桜井市纏向学研究センター統括研究員）

また、‘たからの発掘’として参加学生から寄せられた16の文章の中から数編を掲載する。今回の研修では、参加学生から寄せられた文章は、研修エリアを特化したもの、全体的なもの、特別なテーマに関するものなど、視点や内容は多様であった。形式面でも、評論文的なものをはじめ紀行文・エッセイなど様々なジャンルが見られ、日本語文化を専攻する学生らしい文章となっている^{注5)}。

この他、‘地元メディアの中の大和文化―’と題して、当該地域に関して近年話題となったもので地元の新聞等のメディアに登場した記事を掲載する予定である。

Ⅲ. “「異文化」の創造的融合の理解と地域文化活性化のための相互交流を目指した日本語文化研修”における“自然とまつり”のテーマ化の意義—三輪山の場合を中心に—

ここでは、本研修で“自然とまつり”をテーマとして取り上げ考察することの意義について、三輪山を中心に、述べておきたい。

今回は飛鳥エリアに関しては、“山”のまつりは直接的には扱わなかった。しかし、飛鳥には、ミハ山、柏森、南淵山など、“山”のまつりの対象としての甘南備山の候補地がある。また、多武峰には道教に傾倒した斉明（皇極）女帝が建てた道観（道教寺院）があったとされ、仙人に関わる“山”の祭祀の痕跡がある。

“山”のまつりとして、今回、直接扱ったのは、桜井の三輪山である。日本人の精霊崇拝の原点は山にあり、古来より特定の山を精霊が宿るとして崇めてきた。山は生態系として、森、川、湖沼、そしてそれらに生息する生物など、“いのち”が循環する地であり、自然が集約された場所の典型である。“いのち”とその循環のエネルギーに、“霊力”を感得し、神を認識する心性は、集落の設営の際、特別な山を基準に行われたことからわかる。また、この心性は、自然の“霊力”を代表する太陽を意識し、集落の祭祀施設や墓所など、重要な場所の位置取りが、二至（冬至・夏至）、二分（春分・秋分）における日の出や日の入りが、“霊力”の溢れる特別な山の頂付近で望めるように行われたことからわかる。

以上のような精霊崇拝の原点としての山の代表が三輪山である。大和盆地の西にある二上山に對置するように東に位置する円錐形の秀麗な山容を持つ山である。この山自体を御神体とするため、本殿のない拝殿だけの社殿構成となっている神社が大神神社である。三輪山は、精霊崇拝の原点としての山を象徴する存在として、古来より人々の信仰の対象となるが、その組織的な祭祀は古墳時代にさかのぼり、国の統治にも関与したとされる。

三輪山の祭祀について、西野順也氏は、その著書『日本列島の自然と日本人』（2019年、築地書館）の中で、次のように述べている。

三輪山山麓には三世末から四世紀初めの古墳時代前期に渋谷向山古墳、箸墓古墳、行燈山古墳、メスリ塚、西殿塚古墳など、墳丘長二〇〇～三〇〇メートルある大古墳が出現し、この付近に政権があったことがわかる。（中略）崇神天皇は大和に拠点を置き実質的な大王の座にあった最初の人と考えられている。その天皇がまず三輪山に出雲の神であるオオモノヌシノカミを祀り、国の平定を図ったのである。しかし、古事記のオオクニヌシノカミの伝承からわかるように、三輪山はオオモノヌシノカミが祀られる以前から大和の人々に神山として意識されていた。また、大和に住む人々にとって三輪山は東、つまり日の昇る方向に位置する。生命に向かう山であり、その山上から生命が立ちのぼる聖なる山として拝され親しまれてきたのだ。そこには山自体を崇拝するだけでなく、農耕によってもたらされた太陽崇拝も認められる。（同上書、p79～80）

ここには、三輪山の祭祀が、縄文時代には精霊への崇拝、弥生時代以降は農業神への信仰へと重層

化した後、古墳時代には大和の王権による組織的な祭祀へと進展していくことが指摘されている。この組織的な祭祀は、飛鳥時代には、天武・持統天皇を中心に「天皇」という称号や「日本」という国号の設定、正史としての『日本書紀』の編纂と合わせるかたちで、太陽神と目される皇祖神天照大神を創出させ、それに基づく国家による本格的な祭祀を確立させることになる。この点において、三輪山とその祭祀は、日本という国の成り立ちにおいて、政治的な“まつり”にも直接関与するものである。“自然”の集約された“霊力”の溢れる山を代表する三輪山が、精霊崇拝や祖霊崇拝が重層していく中で、天皇を中心とした首長霊信仰をも生み出し、日本という国の“まつり”の根幹を形成させたことになる。

以上のように、三輪山は、“自然とまつり”をテーマとして取り上げ考察することの意義を示す好例といえよう。

IV. 研修旅行及び研修合宿についてのアンケート調査

(1) 調査の目的

2019年度の日本語文化研修への参加学生に対して、研修の内容^{注(6)}に対する評価・意見と研修合宿についての意見を主として求めるアンケートを実施した。

(2) 調査の方法

研修最終日のバス内で、調査用紙^{注(7)}を配布し、単なる評価点を示すだけではなく、今後の改善へ向けてのコメントを期待している旨を付言した。

(3) 回収率

当日中に16名中16通（100%）の回収を得た。

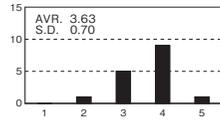
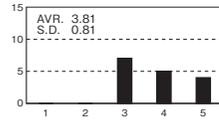
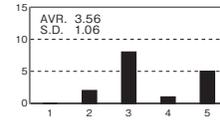
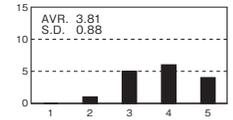
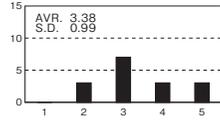
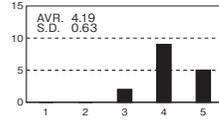
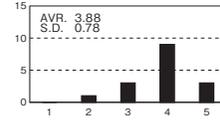
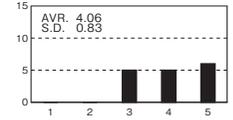
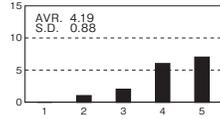
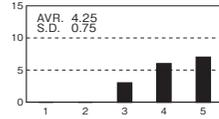
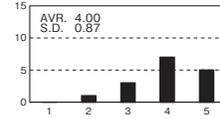
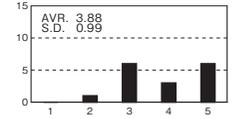
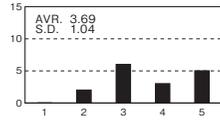
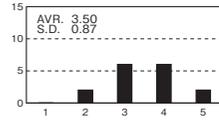
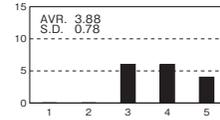
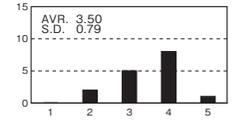
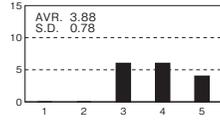
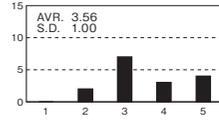
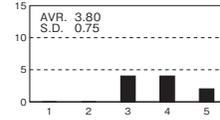
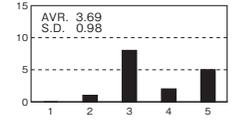
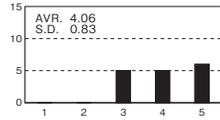
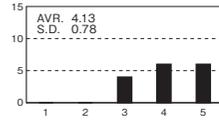
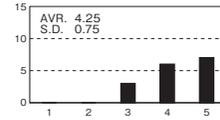
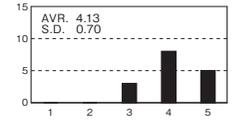
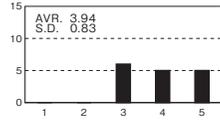
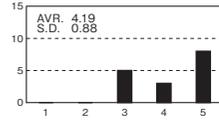
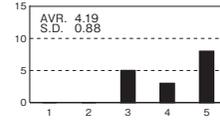
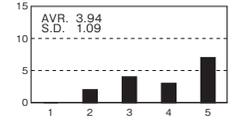
(4) 研修に対する評価・意見と研修合宿についての意見

(Ⅰ)(Ⅱ)は研修に対する評価、(Ⅲ)(Ⅳ)は研修に対する意見、(Ⅴ)(Ⅵ)は研修合宿についての意見をそれぞれ求める項目である。(Ⅲ)の一部及び(Ⅳ)(Ⅵ)は自由記述である。尚、(Ⅶ)では現地集合の往路の交通手段のあり方について選択肢で、また、(Ⅷ)では現地集合・現地解散の滞在型の研修について自由記述で、それぞれ意見を求めた^{注(8)}。

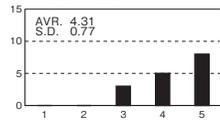
以上の(Ⅰ)～(Ⅷ)の中で、本稿では、[研修に対する評価]の(Ⅰ)“参加学生の自己評価”に関して、5段階評価（1～5）を得点化し、ヒストグラムを作成すると共に、平均値及び標準偏差（得点のバラつき具合を示す数値）を算出した。尚、図中の“AVR.”は平均値、“S.D.”は標準偏差を示す^{注(9)}。

【研修に対する評価】

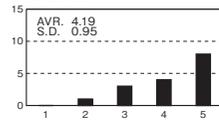
【参加学生の自己評価】

〔前日午前・午後〕
学内直前映像資料視聴〔1日目午後〕
高松塚壁画館展示説明〔1日目午後〕
国宮飛鳥歴史公園館展示説明〔1日目午後〕
国宮飛鳥歴史公園館及び周辺自由研修〔1日目午後〕
赤かめバス飛鳥駅前乗り場（自由必修研修）〔1日目夜〕
地元講師を囲む会（吉野宮滝の魅力）〔2日目午前〕
吉野歴史資料館講演〔2日目午前〕
宮滝遺跡現地説明〔2日目午前〕
飛鳥遺跡（飛鳥谷）及び周辺自由研修〔2日目午前〕
「宮の滝」の瀬と淵（自由必修研修）〔2日目午前・午後〕
ヤマト古墳壁画体験館「四神の館」及び周辺自由研修〔2日目午前・午後〕
原寸大ヤマト古墳石室模型（自由必修研修）〔2日目午後〕
飛鳥京跡（飛鳥谷）及び周辺自由研修〔2日目午後〕
飛鳥京跡（伝板蓋宮跡）（自由必修研修）〔2日目午後〕
飛鳥京跡苑地遺構（自由必修研修）〔2日目午後〕
明日香村埋蔵文化財展示室（自由必修研修）〔2日目夜〕
地元講師を囲む会（飛鳥の魅力）〔3日目早朝〕
牽牛子塚古墳見学〔3日目午前〕
飛鳥びとの館及び周辺自由研修〔3日目午前〕
飛鳥びとの館（自由必修研修）〔3日目午前・午後〕
藤原宮跡及び周辺自由研修〔3日目午前・午後〕
橿原市藤原京資料室（自由必修研修）〔3日目午前・午後〕
藤原宮跡大極殿跡（自由必修研修）〔3日目午後〕
纏向遺跡大型建物跡現地説明〔3日目午後〕
桜井市立埋蔵文化財センター講演〔3日目午後〕
桜井市立埋蔵文化財センター及び周辺自由研修〔3日目午後〕
大神神社拝殿（自由必修研修）〔3日目午後〕
大美和の社皇望台（自由必修研修）

イベント以外の自由時間



総合的達成度



(5) 結果の考察

〔研修に対する評価〕

【参加学生の自己評価】

〈事前研修〉

ここでは、事前研修に対する自己評価について考察しておく。第1回～第5回の出席率の平均値は80.0%で、極めて高い数値であった。欠席者には資料等を自分で読んでおくように指示した。事前研修で配布した研究参考資料（A3で合計38枚）の読破率は、5段階評価で全体で2.88で、‘半分程度読んだ’という参加学生が多かった。バス内事前研修でのDVD等の視聴率は、5段階評価で全体で3.06であった。

〈研修イベント（含む〈学内直前映像資料視聴〉）〉

〔〈学内直前映像資料視聴〉^{注10)}〕

まず、〈学内直前映像資料視聴〉に対する自己評価をみておく。評価の平均値は、3.63と比較的高い評価であった。尚、今回は諸般の事情で実施できなかったが、研修全体の質の向上を目指すために、‘学内直前講演・フリートークの効果的な実施方法’は今後も継続課題として検討していきたい。

〔〈総合的達成度〉〕

以下、当日の研修に対する自己評価について考察しておく。〈総合的達成度〉の平均値が4.19となっているように、学生は総合的にはかなりの成果があったと考えている。今回の研修のタイトルは“星・水・山とまつり 日本人の心の源流：大和の文化を訪ねる—飛鳥・吉野・橿原・桜井—”であり、目的として、‘大和の飛鳥時代～現代にかけての日本語文化に関わる民俗資料及び文化資料を、実地踏査し、星・水・山とまつりを中心に日本人の心の源流として発展してきた地域の文化を通して専門領域へのアプローチを行う’ことをあげている。実質的には、奈良県の高市郡明日香村、吉野郡吉野町、橿原市、桜井市が研修エリアとして設定された。

本研修として前々回はじめた現地集合（飛鳥）・現地解散（大阪）という形式を今回もとった。研修の地域・日程については、第Ⅲ期～第Ⅵ期同様、第Ⅶ期の今回も“〔瀬戸内地域及びその近接地〕外で2泊3日”の研修を行った。平均値4.19は、過去の研修の中では評価の数値としては極めて高い。全22回の研修の評価（それぞれ、3.20, 3.55, 3.31, 3.48, 3.61, 3.94, 4.00, 4.25, 3.80, 4.00, 4.00, 3.65, 4.00, 3.96, 3.63, 3.88, 3.95, 4.18, 3.78, 3.82, 4.30, 4.19）の中では、3番目である。

当日の研修では結果的に27（前々回の大和地域は22、第19回の筑前地域は22、第18回の大和・伊勢地域は24、第17回の肥後・日向地域は27、第16回の和泉・河内地域は32、第15回の西摂津・淡路地域は30、第14回の肥前地域は28、第13回の紀伊地域は25、第12回の山城地域は21、第11回の豊前・豊後地域は18、第10回の摂津・大和地域は20、第9回の讃岐・土佐地域は22、第8回の近江地域及び第6回の吉備地域では17）のイベントを実施したが、この数は過去の研修の中で4番目の数であり、多様なイベントを実施したことを示している。

〔〈イベント以外の自由時間〉〕

一方、〈イベント以外の自由時間〉の平均値は4.31と極めて高い数値であった。前回の第21回の大和地域の4.60、第17回の肥後・日向地域の4.14、第20回の大和地域の4.05、第16回の和泉・河内地域の3.94、第15回の西摂津・淡路地域の3.84、第14回の肥前地域の3.92、第13回の紀伊地域の4.06、第11回の豊前・豊後地域の4.15、第10回の摂津・大和地域の4.21、しまなみ海道を經由して松山まで行った第4回の芸予地域（1泊2日）の4.10など、過去の評価の高かった地域に比べても極めて高い数値である。注目されるのは、同様に高い評価が大和地域で出た点である。具体的には、飛鳥を宿泊地とした前回の第21回、桜井と吉野を宿泊地とした第10回の大和地域での研修である。前者の第21回は、今回と同じ飛鳥のペンションに連泊した。後者の第10回は、桜井では桜井駅前のペンションに、吉野

では金峯山寺への参道入り口付近の老舗和風旅館に宿泊した。共通点は、立地が良く、オーナーがこの種の研修の受け入れに関して経験と理解があり、いずれも貸し切りでアットホームな雰囲気でも過ごせたことにある。

上記の〈イベント以外の自由時間〉の平均値の極めて高い数値は、研修エリアそのものの魅力と共に、主として、一昨年、昨年に続き今回も連泊した宿泊施設の総合的な充実度と連続選定による成熟度に起因すると考えられる。

バスによる移動に関しても、2日目午前の飛鳥から多武峰経由の吉野宮滝までの往路、吉野川沿いから世尊寺経由のキトラ古墳壁画体験館「四神の館」までの復路を中心に、車窓からの眺めを堪能できた。

尚、今回の研修は、全般的に天気には恵まれた。一方で、新型コロナウイルス感染症の予防対策としての、三密の回避、手洗い・うがいの徹底、マスクの着用など、従来とは異なり生活面ではかなりの制約があった。しかし、研修受け入れの経験とそれへの理解のあるオーナーのもと、館内設備が適度に充実しており、周辺環境も、利便性、景観、静けさの面で恵まれており、食事でも充実した宿泊施設を、過去の宿泊実績もふまえて全館貸し切りの連泊で利用し、また、バスによる移動時間も飛鳥と吉野宮滝間を中心に景観を堪能しながら自由時間を過ごせたのは有意義であった。

〔自己評価の高い研修イベント〕

28のイベント（含む学内直前映像資料視聴）を比較してみると、平均値4.25, 4.25, 4.19, 4.19, 4.19とあるように、学生は、2日目午前の〈河川交流センター下の川辺付近の「宮の滝」の瀬と淵（自由必修研修スポット）〉、3日目午前・午後の〈藤原宮跡大極殿跡（自由必修研修スポット）〉、1日目夜の〈地元講師を囲む会：フリートーク〉、3日目午後の〈桜井市立埋蔵文化財センター及び周辺自由研修〉、3日目午後の〈大神神社拝殿（自由必修研修スポット）〉に特に成果を得たと感じている。

この中で、「宮の滝」の瀬と淵や藤原宮跡大極殿跡などは、豊かな自然と優れた景観を背景に実地体験ができる地として、想定範囲内の結果である。しかし、企画側が、「自由研修ではあるがここだけは外せないという意図」で設定した「自由必修研修スポット」が、評価の上位5位までに三つ入っていることは注目される。

わけでも、三輪山の麓に鎮座する大神神社拝殿は、大鳥居、二の鳥居、参道、祓戸神社、夫婦岩、衣掛の杉、巳の杉などを経て、御神体の三輪山へと徐々に高度をあげながら近づいていった後に、杜の中に現れる古色蒼然とした社である点が、評価を押し上げたと考えられる。また、大鳥居付近から参道沿いに、名物の最中を販売する和菓子屋、名産品の三輪そうめん（にゅうめん）の店、酒の神をまつる大神神社にちなんだ老舗酒造店などが軒を連ね、典型的な門前町のにぎわいが創出されている点も、結果的に帰着点の大神神社拝殿の評価につながったと考えられる。さらに、拝殿を中心とする神社の境内に点在するスポットも、三ツ鳥居、三輪山登拝口、狭井神社、薬井戸のご神水「くすり水」、大美和の杜展望台など、魅力あるものが多く、その後のさらなる自由散策に向けて、拝殿で期待感を高めたと考えられる。特に、大美和の杜展望台は、大神神社拝殿と共に「自由必修研修スポット」として設定しており、評価の平均値こそ3.94と評価の上位5位までには入らなかったが、評価は低くはない。この展望台からは、東に御神体の三輪山を、西に二上山を、南西に大和三山を眺望しながら、大和盆地の大部分を視野におさめることができる。このスポットの訪問に期待したのは、大神神社の御神体である三輪山の位置が、大和盆地の東にあって伊勢方面に、また、付近を流れる初瀬川（大和川）を介して大阪の難波に、つながる地であることに気付くことである。特に、難波のある西から大和盆地に入る際には、大和盆地唯一の水の出口である亀の背溪谷を渡る大和川沿いルート、二上山の南の竹内峠を渡る竹内街道ルートが主であるが、いずれも盆地に入ると同時に最も目立つのが円錐形の秀麗な山容を持つ三輪山である。大美和の杜展望台も含めて、大神神社拝殿は、その三輪山

を御神体として祀る場が大神神社拝殿であることを意識化する上で、研修の最終訪問スポットとして適地であった。

今回の七つのいわゆる自由研修の平均値は3.96で、過去全21回の中の第1番目の数値となった第10回の摂津・大和における研修の平均値4.45や第2番目の数値となった第5回の大和地域を対象とした特別企画の平均値4.36などと比べるとやや低いが、過去の研修の中ではかなり高い数値となった。

共に大和地域における研修であった前回第21回の4.04、前々回第20回の4.10も含めて、自由研修の実施地として、大和地域は参加者の自己評価が高くなる傾向がある。

本研修では自由研修の地を設定する際の望ましい条件として、日本の歴史の中で注目を集めた明確な時代性があり、徒歩で移動しうるコンパクトなエリア内に文化的な多様性があることを考えている。前回同様に、今回も、大和地域において、飛鳥、吉野を中心に、これら二つの条件に適合した地の設定ができた。

もっとも、自由研修の地の設定では、上記の二つの条件を優先しつつも、バスによる移動を伴う場合には、現地到着直前のバス内事前研修と自由研修の時間確保が相反する中、それらのバランスを考慮するならば、二つの地に適度な距離があること、また、その沿道に特段注目すべき景観等がないこと、さらには、バス内事前研修の実効性を考慮するならば、可能な範囲でバス酔いを回避しうる移動ルートを確保することなどの前提が必要である。

【講演及びフリートーク】

今回、講演及びフリートークは全部で四つで、講演全体の平均値は3.97でかなり高い評価であった。平均値3.97は、第1回～21回の研修における同種の講演の平均値（それぞれ、3.53、3.11、3.49、3.61、3.94、4.04、4.06、4.00、3.87、4.07、4.00、4.01、3.81、3.78、3.64、3.94、3.91、4.09、3.87、4.08、4.15）と比べて、過去10番目の数値であり、比較的高い評価となった。今回も講演に対する高いモチベーションを持った地元講師に恵まれ、また、参加学生もその熱意・意欲に対して、傾聴や質疑応答を通して真摯に応えていた。

尚、今回実施した二つの〈地元講師を囲む会：フリートーク〉は、それぞれ4.19と3.88であり、前回及び前々回と同じ講師の方によるものであったが、内容面の充実が比較的高い評価につながった。

両フリートークが共に、連泊した宿泊所の空調設備やテーブル、椅子、調度品、グランドピアノなどの備品が整った心地の良い雰囲気のある1Fラウンジで行われたことも有効に機能した。

【総括】

以上を、思い描かれる参加学生の平均像として総括するならば、次の①から⑧をその構成要素として指摘することができる。すなわち、

①河川交流センター下の川辺付近の「宮の滝」の瀬と淵、藤原宮跡大極殿跡、地元講師を囲む会：フリートーク（1日目夜）、桜井市立埋蔵文化財センター及び周辺自由研修、大神神社拝殿を中心に、講演・フリートークや現地説明など地元講師との相互交流を目指した研修を通して、大和の文化・歴史・風土について学んだ／②改めて大和地域には、日本という国の発祥した地としての歴史と文化があること、また、日本最古の都が置かれた地として渡来文化がいち早く流入・受容されたことなどに特色を持つという地域の伝統があることを認識した／③特に“星・水・山とまつり 日本人の心の源流”という視点から、異国の文化としての異文化も含めて、異文化が創造的に融合した文化があることを認識した／④③に関する価値ある歴史的遺産、文化施設、自然の造形、風土性を持った伝統文化を直接体験して感銘を受けた／⑤天候に恵まれ、バスによる移動中も、飛鳥と吉野宮滝間の往路・復路を中心に総じて快適であった／⑥地元講師の人たちとの交流ができた／⑦感染症予防対策のために生活面で制約はあったものの、充実した館内設備、また利便性、景観、静けさなどの面で優れた周辺環境、さらには味に定評のあるレストランが併設されたペンションならではの食事を堪能しながら、

同一の宿泊所に貸し切りで連泊し、アットホームな雰囲気の中で気の合う友人と共に有意義な時間を過ごせた／⑧総じて意欲を持って研修に参加できた、というものである^{注1)}。

終わりに

本研修は、2020年度も、2016年度以前の移動型研修ではなく、滞在型研修を実施することが決まっている。第Ⅷ期の初年度は、2泊3日の日程で、今年度同様に‘大和の歴史と文化’をテーマに、飛鳥・吉野・橿原・斑鳩を訪問エリアとして設定し、現地で借り上げバスを利用することを前提に、内容の検討を進めている。新型コロナウイルス感染症の影響で、十分な事前調査が難しい状況であるが、いずれのエリアもこれまでに訪問経験がある点を活かしながら、周到な準備をしたい。

2020年は『日本書紀』が世に出て1300年の節目を迎えたこともあり、大和地域では、研究成果も含めて良質の情報が新たに数多く発信され、オリンピックや万博の開催、また世界遺産への登録なども視野に、文化施設を中心に個々のエリアの整備も進んできている。本研修では、2003年に飛鳥、2008年に吉野、そして2018～2020年に両エリアを既に訪問したことになる。これらの実績と共に、副研修エリアの選定も含めて、訪問エリアに関する以上の好機を活かしながら研修の準備を進めたい。

本研修は、前々回から、20年余りにわたり西日本各地を探訪する中で得てきた成果を活用しながら、日本創生の地にして日本人の心の原点の地でもある飛鳥で、“自然とまつり”の視点から“日本とは何か”を改めて問い直しはじめることになった。目指すところは、渡来文化との融合の中で生まれた“日本”という国の成り立ちの理解、そして、もう一つの“日本”としての‘地域文化’の活性化のための相互交流である。

第Ⅷ期同様に、第Ⅷ期の研修においても、時代の流れを視野に入れつつ、ものがたり観光行動、比較文化、旅の文化などに関する学外の研究組織からの示唆を得ることも重要であると考えている。その示唆のもとに、新カリキュラムに基づく本研修の受講生と共に新たな形式を試みる中で、研修のより進化・充実したあり方を考究していきたい。

[注]

- (1) この点についての詳細は、本研修の報告冊子に、「『異文化』の創造的融合の実際—大和研修（飛鳥・吉野・橿原・桜井）を中心に—」という小稿を執筆し掲載する予定である。
- (2) “秋枝（青木）美保・戸田利彦『『異文化』の理解を目指した研修旅行（Ⅳ）—“瀬戸内（福山・倉敷）国際交流史”の現地研修—』、『比治山大学現代文化学部紀要』第6号、1999”から、“戸田利彦『異文化』の創造的融合の理解と地域文化活性化のための相互交流を目指した日本語文化研修（Ⅷ）—“大和地域（飛鳥・吉野・橿原・田原本）の文化史”の現地研修—』、『比治山大学現代文化学部紀要』第26号、2019”まで、21回分の成果を本紀要に掲載している。
- (3) 研修参加学生の事前研修の流れについては、[注] (2)に示した文献の第26号を参照のこと。
- (4) B5（表のみ）1枚からなる自由研修計画書を①～⑦の7枚使用。[注] (2)に示した文献の第6号の〔資料2〕に同形式のもの掲載。1日目午後の自由研修計画書①国営飛鳥歴史公園館及び周辺については、本番前日の直前研修の際に配布し、翌日の現地集合直後に回収した。
- (5) 本稿の執筆者である戸田も、この研修の報告冊子に、「『気』の文化の継承過程に関する研究（ⅩⅦ）—纏向遺跡における道教の影響及び山岳信仰としての三輪信仰の成立事情を中心に—」という小稿を執筆する予定である。
- (6) 各イベント企画のねらいについて、今回の新たなものについて以下に示しておく。尚、前回と同

様のものについては、[注] (2)に示した文献の第26号を参照のこと。

〈3日目〉纏向遺跡大型建物跡現地説明（テーマ：大和盆地における初期ヤマト王権発祥地としての古代都市）（桜井の自然と風土の理解）／桜井市立埋蔵文化財センター講演（テーマ：纏向遺跡の出土物と三輪山・大神神社の祭祀）（桜井の歴史と風土の理解）／桜井市立埋蔵文化財センター及び周辺自由研修（自分の足で史跡や文化施設を踏査することによる桜井の自然と風土の理解）／大神神社拝殿（桜井の自然と風土の理解）（自由必修研修）／大美和の杜展望台（大和の自然と風土の理解）（自由必修研修）

- (7) A3（表裏）2枚及びA3（表）（No.1～No.6）からなる調査紙を使用。[注] (2)に示した文献の第6号の〔資料3〕に同形式のもの掲載。
- (8) (Ⅱ)～(Ⅵ)の具体的な調査項目及び選択肢等については、[注] (2)に示した文献の第26号を参照のこと。
- (9) (Ⅱ)“イベント企画についての評価”に関しては、事前研修については、第1回～第5回の学内事前研修形式およびその企画内容に対する評価の平均値は、それぞれ3.63, 3.68であった。また、第6回・7回のバス内事前研修形式及びその企画内容に対する評価の平均値は、それぞれ4.00, 3.69であった。(Ⅱ)“イベント企画についての評価”の研修当日分も含めて、(Ⅲ)～(Ⅷ)の結果及びその考察については、紙幅の関係で今回は割愛し、別の機会に譲ることとする。
- (10) このイベントの意図及び具体的な内容については、[注] (2)に示した文献の第26号の[注] (8)を参照のこと。
- (11) (Ⅱ)“イベント企画についての評価”に関しては、28のイベント企画（含む学内直前映像資料視聴）の平均値が3.95であるように、参加学生は高い評価をしていた。標準偏差の平均値も平均値も0.84と分散は比較的小さかった。参加学生の自己評価としての〈総合的達成度〉の4.19と勘案すると、参加学生は、全体としては、企画そのものの充実度がある程度認めた上で、自らもある程度意欲を持って行動し企画を消化しつつそれなりの成果を上げた結果となっている。

参考文献

- 相原嘉之（2018）『飛鳥・藤原の宮都を語る 「日本国」誕生の軌跡』吉川弘文館
- 浅野裕一（2006）『古代中国の宇宙論』岩波書店
- 飛鳥資料館（2001）『星々と日月の考古学』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所飛鳥資料館
- 石井正信（2008）『真秀ろばの地・大和からの願い 日本の心の蘇生一ひとの語源・秀真・縄魂の語るもの一』文芸社
- 上野 誠（2008）『大和三山の古代』講談社
- 上野 誠（2015）『日本人にとって聖なるものとは何か』中央公論新社
- 大隈和雄（2003）『文化史の構想』吉川弘文館
- 菊池章太（2008）『儒教・仏教・道教—東アジアの思想空間』講談社
- 工藤 隆（2019）『深層日本論 ヤマト少数民族という視座』新潮社
- 笹生 衛（2016）『神と死者の考古学 古代のまつりと信仰』吉川弘文館
- J.V.ネウストプニー（1995）『新しい日本語教育のために』大修館書店
- 諏訪春雄（2018）『日本の風水』KADOKAWA
- 武澤秀一（2017）『建築から見た日本古代史』筑摩書房
- 鶴井忠義（2012）『奈良の古代文化② 斉明女帝と狂心渠』青垣出版
- 戸矢 学（2013）『神道と風水』河出書房新社

- 戸矢 学 (2016) 『ニギハヤヒ 「先代旧事本紀」から探る物部氏の祖神〈増補新版〉』河出書房新社
戸矢 学 (2019) 『決定版ヒルコ 棄てられた謎の神』河出書房新社
「21世紀の『日本事情』」編集委員会 (1999) 『21世紀の『日本事情』—日本語教育から文化リテラシー
へ—』『日本事情』研究会
中山和敬 (2013) 『大神神社』学生社
西野順也 (2019) 『日本列島の自然と日本人』築地書館
仁藤敦史 (2011) 『都はなぜ移るのか—遷都の古代史—』吉川弘文館
福永光司・千田 稔・高橋 徹 (2003) 『日本の道教遺跡を歩く』朝日新聞社
藤田友治 (2002) 『古代日本と神仙思想』五月書房
宝賀寿男 (2014) 『古代氏族の研究⑤ 中臣氏 ト占を担った古代占部の後裔』青垣出版
細川英雄 (1994) 『実践『日本事情』入門』大修館書店
細川英雄 (1999) 『日本語教育と日本事情—異文化を越える—』明石書店
細川英雄 (2002) 『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社
前林清和・佐藤貢悦・小林 寛 (2000) 『〈気〉の比較文化—中国・韓国・日本』昭和堂
牧野成一 (1996) 『ウチとソトの言語文化学』アルク
豆板敏男 (2015) 『奈良の古代文化④ 天文で解ける箸墓古墳の謎』青垣出版
宮家 準 (2004) 『霊山と日本人』日本放送出版協会
三輪山文化研究会 (2002) 『日本文化のなかの自然と信仰—三輪山からのメッセージ—』大神神社
吉野裕子 (1993) 『持統天皇 日本古代帝王の呪術』人文書院
吉野裕子 (2000) 『陰陽五行思想からみた日本の祭 伊勢神宮祭祀・大嘗祭を中心として』人文書院
吉村武彦 (2010) 『ヤマト王権 シリーズ日本古代史②』岩波書店

〈キーワード〉

異文化, 大和, 文化史, 実地研修, 自文化

戸田 利彦 (現代文化学部言語文化学科日本語文化コース)

(2020. 10. 29 受理)